



茶の湯の愉しみ

会員 飯田 美弥子 (53期)

私がお茶を習っていることが知れると、茶の湯って何の役に立つのか?と問う人がある。

役に立つも立たないも、私が楽しいと感じるから、お稽古を続けている。

茶道と出会わぬ頃は、知らなくても何ら不便を感じなかった事どもを、様々知ることによって、私の生活が彩り豊かになった。

こんなに楽しい!ということをも、少しご紹介いたしましょう。

1 旅の愉しみ

出張先で、萩や信楽、小代焼など、国焼の茶碗を見つけると、手頃な値段の物をお土産に買ってくる。

和倉温泉では輪島塗の香合を買ったな、井筒の蓋置は犬山の如庵で求めたっけ、と思い出が残る。

土佐の「小男鹿」、甲府の「月の雫」など、土地の銘菓も楽しい。

滋賀・長浜駅前で、秀吉にお茶を献じる石田三成の像を見つけたときは、おお、ここは、初めて2人が出会ったところか、と感慨を覚え、山形・上ノ山で庵を見つけては、ここが紫衣事件で流された沢庵和尚の寓居であったか、と胸を痛める、というのもまた楽し。

2 季節感を味わう

私は、高尾山にトンネルを掘らせない「高尾山天狗裁判」の弁護団のメンバーである。が、その実、野草などの知識は全くなかった。

ところが、茶室の床の間の花は、「野にあるように」生けるのがよい、とされている。

二月は、藤原家隆の歌にある「雪間の草」の風情。三月には梅。四月はもとより、桜。五月になると、「かきつばた」の歌に因んで、伊勢物語の設え。



椿と木槿は、なんと種類の多いこと!

平敦盛の被り物に似ているからその名がついたという敦盛草。茎が釣り竿のように垂れるから、釣船草(別名、浦島草)。

床の間の野草が季節を教えてくれ、高尾山では、その花が野に咲いているところを実際に見つけられる。

私は、これまでなんと物を知らず、感じずにきたことだろう。

3 銘の遊び

茶杓や茶碗に銘がついていることがある。これがまた、楽しい。

「雁取」は、茶碗のお礼に雁が贈られたから。「俊寛」は楽焼の見本として薩摩に茶碗を幾つか送ったところ、一つだけ薩摩に残されたから。「猫の鼻」は長すぎる茶杓の丈を詰めたい→冷たい→冷たいのは「猫の鼻」の連想からだという。

昔日の茶人のユーモアが感じられる。

秋の夜のお稽古。あいにくの雨模様で、空に月がない。「茶杓の御銘は?」という問いに、亭主役の答え。「無月でございます。」おお、なんと場に相応しいことよ! 私は、客をしながら、舌を巻いた。

4 その他いろいろ

茶道の所作は、着物を着てする仕様になっているから、着付けを学んだ。着物を着られるようになると、着物で出かける機会が増える。和服での弁護団報告は評判がよい。

茶の席中で歌を詠む科目がある。仕方なく、お習字を始めたら、床の間の掛け軸が読めるようになった。嬉しいことである。

どうです? 面白そう、と思いませんか?